

“中医協～おもてとウラの力学”

増田 英明

医療福祉ジャーナリズム分野 修士
ぱぶりっくれーしょんずの職人
東京青山キャンパス

平成 28 年度・春学期

医療福祉ジャーナリズム特論

薬害エイズ被害者が中医協委員になって見えてきたこと

花井十伍さん

目から鱗の実態

4年ぶり、十伍さんの話をとても楽しみにしていました。
2012年の医療政策の勉強会では、
薬害エイズ被害者、原告団としての“リーダーシップ”についてうかがいましたが、
今回は、中央社会保険医療協議会(中医協)の支払側委員としてのお話。
これまで聞いてきた診療側委員、公益委員、診療報酬コンサルタントの話と比べて、
十伍さんの本音ベースの話は、まさに目から鱗が落ちるものばかりでした。

特に、興味深かったのは、医療ムラの実態とも言える“中医協・おもてとウラの力学”。
各委員の職能、背負っている業界の違いによる力関係と相互の関係性は、
傍聴したことのない私には、初めて聞くことばかりでした。

威張っているようで。。

威張っているようで、実は官僚の思惑に乗せられている二号委員の医師。
二号委員を乗せるためのツールとして、時に利用されている支払側委員。
限りなく医師に遠慮している日本看護協会、日本薬剤師会。
医療費抑制だけで、保険者機能を発揮できない健保連。
金のためには、なりふり構わない製薬業界。
そして、一番狡猾かもしれない事務方・官僚。

視点と矜持をもった闘士

さまざまな利害関係性の中で、被害者の視点と矜持をもって、
国民にとっての正論と本音を主張してこられた十伍さんは、まさに闘士でした。
これまでの5年超における経験と知識は、比類のないものでした。

「非公開で、限りなく真実を言わない」という、極めて稀有な審議会の中の中医協。
診療報酬による政策誘導の限界も指摘されるなか、
委員それぞれの関係性の中で、政策を実現していることの一部を見ることができました。
勝村さんから十伍さんに受け継がれてきた闘魂が、これからも繋がっていきますようにと願い、
御礼の結びといたします。
(了)